



Title	『善惡因果經』の流通とその史的背景
Author(s)	森安, 孝夫
Citation	三島海雲記念財団事業報告書. 1986, 23, p. 225-231
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13182
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『善惡因果經』の流通とその史的背景

大阪大学文学部助教授 森 安 孝 夫

研究目的

キリスト教が果たした役割を無視して完全な西洋史を再構成するのが不可能であるのと同様、中央アジア～東アジアの歴史は仏教を抜きにしては語れない。ある時代、ある地域の仏教と社会の結びつきを探る第一歩は、そこに流布していた仏典を洗い出し、それに質（成立の由来とレベル）と量（普及度をも含む）の両面から分析を加えることである〔共時的〕。一方、それと同時に、それぞれの仏典がたどった歴史的変遷（増広とか異国語への翻訳とかはやりすたりなど）の経過も視野の中に収めておかねばならない〔通時的〕。キリスト教における聖書とは異なり、仏典には出家者や学僧に真理とか菩提とかを説く高邁なものから、俗人にも分り易い六道輪廻や因果応報などを説く卑俗なものまで、様々のレベルのものがある。さらに後者の中には、仏陀やその弟子たちの説いた所を集めた「本物の」仏典の外に、後世になんらかの意図をもって作られたいわゆる「偽經」が含まれる。その中でも特に代表的なのが、6世紀頃に中国で成立した『善惡因果經』である。またこれは何ヶ国語にも訳され、東アジアから中央アジアにかけて広く流布した仏典として最も有名なものの一つである。にもかかわらず、本仏典はこれまで、仏教学者からはその内容の卑俗さゆえに、言及はあっても正面からはほとんど取り上げられず、歴史学者には仏典を歴史史料として取り上げようとする観点が欠けていたために全く顧慮され

なかった。私は、今後への展望を切り開く意味で、この『善惡因果經』の研究を一つのケース・スタディにしたいと考えている。

研究経過と展望

本經を、共時的にせよ通時的にせよ、研究の対象とするためには、まずテキストそのものの文献学的研究から始めねばならない。これまでに知られている本經のテキストには漢文・ソグド文・チベット文・モンゴル文・カルムック文・満州文のものがある。そもそも本經は6世紀頃の中国で偽作されたもの^①であるから、すべての原テキストが漢文であることは明らかである。しかし中国では偽經と認定されたが故に正式の大藏經の中に收められず、為に漢文テキストは早くに散佚してしまっていた。然るに今世紀初頭の敦煌文書の発見により、それは再び日の目を見るに至った。一方、日本では、7～8世紀頃に伝えられたテキストが幾多の手写や版を重ねながら、今日にまで伝存された。我々は、漢字文化圏のいわば両端に残った漢文テキストを、彼比対照することによって、漢文オリジナルを復元する条件に恵まれたのであり、その実際の作業が初年度の最大の成果であった。我々が写真や実物により参照することができた漢文テキストは以下の23種（ただし総て同一系統のテキスト）である。今、それぞれの写本ないし版本の残存状況を、大正新修大藏經、第85巻、No. 2881, pp. 1380 b～1383 bと対比する形で図示する。

大正	1380ページ b c	a b c	a b c	1382ページ a b c	1383ページ a b
① P 2055			完 本		
③ P 2922			完 本		
③ S 714	b11				
④ S 2077					
⑤ S 3400		b15			
⑥ S 4911	c11				
⑦ S 4917				a1 b4	
⑧ S 4978	b5				
⑨ S 5458		完 本			
⑯ S 5602		完 本			
⑪ S 5610				c3	
⑫ S 6311	c6				
⑬ S 6960		c24			
⑭ C 77			a9		
⑯ 辰 60	b3				
⑯ 乃24+冬79	a9 乃24 b6		冬 79		
⑰ 玉38+盈58		完 本			
⑯ 奈34+果90		a19 果90 c8 奈34 a6			
⑯ 裳 50	a13	a8			
⑯ 中 村 本			a6		
㉑ 直 解		完 本			
㉒ 要 解		完 本			
㉓ 銅		完 本			

敦煌本 {
 ①～② ペリオ本, パリ国立図書館蔵
 ③～⑯ スタイン本, ロンドン大英図書館蔵
 ⑭ スタイン本, インディニアニオフィス図書館蔵 (註⑤のプサン目録参照)
 ⑯～⑯ 北京本, 北京図書館蔵
 ㉐ 中村不折氏旧蔵本

日本伝来本 {
 ㉑ 了意, 善惡因果經直解
 ㉒ 覚深, 善惡因果經要解
 ㉓ 善惡因果經銅

☆ ちなみに大正新修大藏經本は、大日本統藏經 (元藏) 本と中村本とを底本にしたものである。

テキストの校訂には、最良と思われるものを一つ選び出してそれを底本にし、他と校合するのが常道であるが、今回はその方法が必ずしも得策でないと判断したので、全テキストの中で最良と思われる字句を探っていって、いわば架空のテキストを復元し、それに詳細な註を付けることにした。

敦煌蔵経洞からは漢文テキストの外に、ソグド文テキスト（1種）とチベット文テキスト（3種）も発見された。すでに衆知の如く、ソグド文は漢文から翻訳された完本であるが、漢文の難解な部分はところどころとばして訳している。ソグド文テキストに関しては既にゴーチオの仏訳^②とマッケンジーの英訳^③があるが、漢文テキストの復元と一緒に行なった共同研究者の吉田豊氏（IBU国際佛教大学文学部講師、イラン言語学）がもう一度綿密にチェックしなおすことになっている。

チベット文テキストは各種のチベット大蔵經（北京版、デルゲ版、チョーネ版、ナルタン版）のいずれにも、二つの全く系統を異にするテキストが収蔵されている。参照に便利な北京版に例をとれば、大谷目録^④のNo. 1023（P1と略称）とNo. 1024（P2と略称）がそれに当たる。一方、

同じく共同研究者の武内紹人氏（近畿大学教養部講師、チベット言語学）によれば、敦煌出土のチベット文テキストは3種（いずれも不完全なもの；それぞれT1, T2, T3と略称）あり、大蔵經との対応関係を示せば下のようになる。

即ち敦煌本はP1の系統に属し、P2（P1より短いもの）とは別の系統である。またP1には奥書きが付いており、それによるとこれは吐蕃支配期から帰義軍初期（9世紀初～中葉）の河西（敦煌を含む）で活躍したChos-grub（法成）によりサンスクリットと漢文から翻訳されたという。もちろんサンスクリットからというのは權威づけのための虚言であり、実際には漢文だけから訳されたものである。^⑤ 我々はチベット文についても校訂テキストを作る予定である。

モンゴル大蔵經にも二系統のモンゴル文『善惡因果經』が入っている。リゲティ目録^⑥でいえばNo. 1118とNo. 1119がそれに当たる（それぞれM1, M2と略称）。モンゴル大蔵經成立の歴史的背景^⑦を考えれば、これらM1, M2がチベット大蔵經中の二系統のテキスト（ここではP1, P2で代表させる）からの翻訳であろうことは容易に推測

P 1	204	205	206	207	208	209	210	216
	b, a, b, a, b, a, b, a, b, a, b							a, b
T 1	b2					a5		b7
T 2					b7	b1		
T 3 A	a3							
B	b4							

T 1 = VP^⑤ 220 : Ch.73 vii. 2

T 2 = VP 221 : Ch.73 xv. frag. 4

T 3 A = VP 335 (2) : Ch.73 xiii. 1

B = VP 335 (3)

されるが（テキストの長さからみてP 1 → M 1, P 2 → M 2），経題・奥書きそして本文の部分的翻訳による対照の結果のいずれをとっても、この推測を裏切ってはいない。

ところで大阪大学文学部では昭和59年にモンゴル文『善惡因果經』の一写本を購入した。大谷探検隊隊員吉川小一郎氏の旧蔵していたものというが、その真偽のほどは不明である。全10葉で首尾完結し（ただし第3葉と第9葉は既に個人の所有に帰していたため写真のみ），各葉はタテ約10cm, ヨコ約26cm, 淡褐色で中手の固い紙に独特の楷書体で書かれている。頁付けは左端にモンゴル文で、右端に朱の漢字（おそらく後補）で示される。そ

の他の細かい点は省略するが、この写本の外形的特徴は、これまでに17世紀のものと断定されたいくつものモンゴル写本の特徴ときわめて近いものである。^⑨ 内容的には、実に驚くべきことに、従来知られていたモンゴル大藏經所収本（M1, M2）とは全く別の系統のテキストであり、目下のところは天下の孤本のようである。翻訳に用いられた用語も、チベット語（Tib.）からの直訳やサンスクリット（Skt.）名の直接音写が主流であるM1, M2のそれとは異なり、13-14世紀のウイグル語（Uig.）からモンゴル語に借用された仏教用語が随所にみられる。

今、その一端を例示する。

菩薩

M 1 : bodhi-satava
M 2 : " } < Skt. bodhisattva

阪大本: bodistv < Uig. bodistv < Sogd. pwtyst^θ ^⑩

給孤独（長者）

M 1 : anātha-bindadi
M 2 : " } < Skt. anāthapindada
孤独な者に給与する（長者）

阪大本: anaadabindeki (bayan) < Uig. anaadapindiki ^⑪ (baya^zut)
長者 長者

< Tokh. B. anāthapindike ^⑫ < Skt. or Pali anāthapindika ^⑬

祇陀（太子）

M 1 : ilarurcid(qan kubegün) ⇔ Tib. (rgyal bu) rgyal byed ^⑭ ⇔ Skt. jeta ^⑮
勝者 王 子 王子 勝業 勝

M 2 : čit (kubegün)
息子 } < Uig. čit ^⑯ (tigin) < Skt. jeta
にいる 息子 王子

阪大本: čit (taki kubegün)

ぎじゅぎっことくおん
祇樹給孤獨園

M 1 : ilarurčid qan kubegün-ü čečeglig anātha-bindadi-yin qotala - yi
祇陀 太 子 の 花園, 紿孤獨 の 一切 を

bayasqaqui qoriyan ← Tib. rgyal bu rgyal byed kyi tshal
幸福にする 圈い 祇 陀 太 子 の 園林

mgon med zas sbyin gyi kun dga' ra ba ← Skt. jetavana
よるべなき者に食物を施すもの の 一切 欲喜の圏い 祇陀の樹林
(=給孤獨)

anāthapindadasyārāma¹⁷
給孤獨(長者)の園

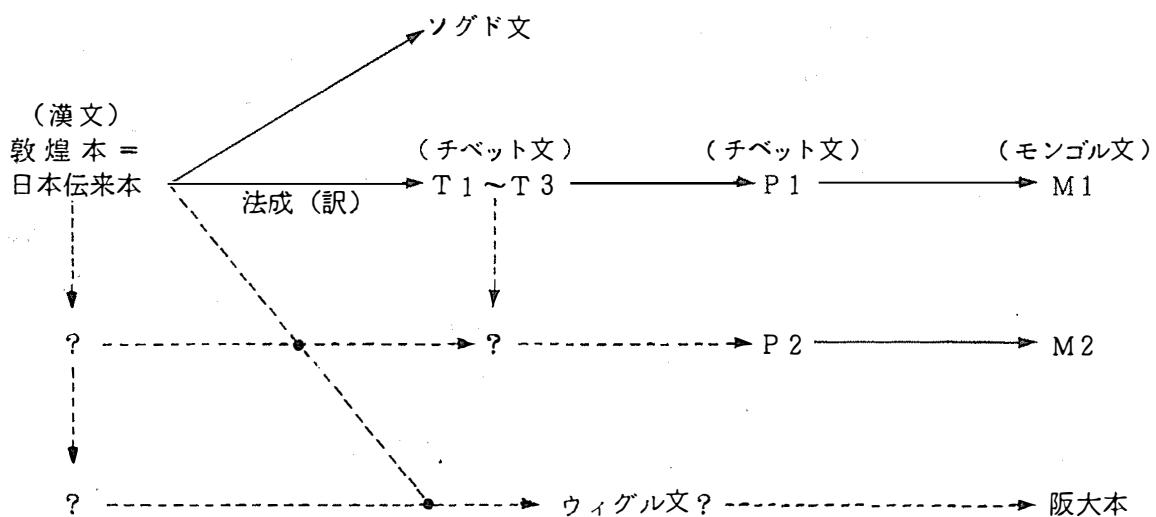
M 2 : siravasta-dur čit kubegün-ü čečeglig anātha-bindadi-yin
舍衛(城)にある祇陀太子の花園

qotala - yi bayasaqaqui qoriyan

阪大本 : s//vast balrasun-dur čit taki kubegün-ü jimislig-tür
舍衛 城 にある 祇陀 にいる 太子 の 果樹園 にある

anaadabindeki bayan-u süm-e cf. Uig. širavast baliq;
給孤獨 長者の寺院 舍衛 城

Uig. čit tiginning yimišliki čitavan sangram¹⁸
祇陀 太子 の 果樹園 祇樹林 僧院



* カルムック文、満州文については未だテキストを入手していないので検討できなかった。ただし、カルムック文テキスト¹⁹はそのタイトルだけでみるとかぎりは阪大本と同系統のようである。

つまり、阪大写本自体はたとえ17世紀のものであるにしても、その原本はもっと古くに成立した可能性が十分にあるというわけである。さらにいえば、この系統のテキストは、当然あってしかるべきなのに未だその存在が知られていないウイグル文『善惡因果經』から直接翻訳された可能性さえあるといえよう。我々はM 1, M 2, 阪大本の3系統のモンゴル文テキストについても完全な訳註を用意している。

現段階で我々が推定している左のようなテキストの系譜は、各テキストの校訂本とその詳細な訳註を完成することによって、より正確な形になっていくことと思う。最終的目標は、各国語のテキストが出現した歴史的背景〔通時的〕と、それぞれの社会での受容のされ方〔共時的〕を探ることにあるが、さしあたっては訳註をはじめとする文献学的な研究に力を注いでいきたい。

註

- ① cf. 牧田諦亮『疑經研究』京都 1976, 第11章「善惡因果經について」pp. 336 – 344.
- ② R. Gauthiot & P. Pelliot, Le Sūtra des Causes et des Effets du Bien et du Mal, 3 vols., Paris 1920 – 1928.
- ③ D. N. MacKenzie, The ‘Sūtra of the Causes and Effects of Actions’ in Sogdian, London 1970.
- ④ 「大谷大学図書館蔵 西藏大藏經 甘珠爾勘同目録」I, 京都 1930, pp. 395 – 396.
また『東北帝国大学蔵版 西藏大藏經總目録』仙台 1934, p. 65 の № 354 及び № 355 も参考せよ。
- ⑤ VP はプサン目録のチベット文の略号である。
因みに C は同目録の漢文の略号である。
cf. Catalogue of the Tibetan Manuscripts from Tun-huang in the India Office

Library, by the late Louis de la Vallée Poussin, with an Appendix on the Chinese Manuscripts by Kazuo Enoki, London 1962. また、東洋文庫チベット研究委員会(編)『スタイン蒐集チベット語文献解題目録—第3分冊一』東京 1979, pp. 20 – 21も見よ。

- ⑥ P. Pelliot “Notes à propos d'un catalogue du Kanjur”, Journal Asiatique, 1914 juillet-août, pp. 142 – 143.
- ⑦ L. Ligeti Catalogue du Kanjur Mongol Imprimé, Vol. 1, Budapest 1942, p. 302. また F. A. Bischoff, Der Kanjur und seine Kolophone, Bd. II, Bloomington 1968, p. 546 も参照。
- ⑧ 例えば、さしあたっては、次のものを参照。
金岡秀友「蒙古文大藏經の成立過程」「佛教史学」6 – 1, 1957, pp. 41 – 57。
- ⑨ ここに二つだけ比較の材料を挙げる。W. Heissig, “Zur Bestandsaufnahme und Katalogisierung mongolischer Handschriften und Blockdrucke in Japan”, Ural-Altaische Jahrbücher, 38, 1966, p. 86, No. 5 ; A. Sárközi, “A Pre-classical Mongolian Prophetic Book”, Acta Orientalia Hungaricae, 24 – 1, 1971, p. 43 & plate. とくに前者は龍谷大学図書館に所蔵されるもので、本研究に対する同図書館側の理解を得て、他のモンゴル写本と共に実見する機会に恵まれた。また、ついでながら、大阪外国語大学図書館所蔵の石浜文庫中のモンゴル写本にも親しく触れることが出来たので、この場を借りて両図書館に感謝の意を表したい。
- ⑩ 庄垣内正弘「‘古代ウイグル語’におけるインド来源借用語彙の導入経路について」『アジア・アフリカ言語文化研究』15, 1978, pp. 94,

- 103。
- ⑪ 庄垣内正弘「ウイグル語写本・‘觀音經相應’—觀音經に関する‘avadāna’—」『東洋学報』58-1・2. 1976, pp. 024, 025 ; K. Röhrborn, Uigurisches Wörterbuch, Lieferung 2, Wiesbaden 1979, p. 131.
- ⑫ W. Thomas, Tocharisches Elementarbuch, Bd. II, Heidelberg 1964, p. 162.
- ⑬ 赤沼智善『印度佛教固有名詞辭典』Repr. 京都 1979, pp. 32 - 35.
- ⑭ 敦煌文書 VP 220 にみえる形。
- ⑮ 赤沼, p. 245.
- ⑯ 庄垣内, 前註⑪引用論文, pp. 024, 036.
- ⑰ 柳亮三郎(編)『梵藏漢和四訳対校 翻訳名義大集』Repr. 東京 1973, Nos. 4111-4112 (p. 277) ; 赤沼, pp. 245-248 ; 織田得能『仏教大辞典』Repr. 東京 1980, pp. 24-25, 264.
- ⑲ 庄垣内, 前註⑪引用論文, pp. 024, 036.
- ⑳ W. Heissig, Mongolische Handschriften • Blockdrucke • Landkarten, Wiesbaden 1961, № 502-VII (pp. 272-273).